

第1回 大月短期大学基本問題審議会

日 時 平成17年9月2日(金)午後2時～午後3時40分

会 場 短期大学会議室

出席者 【委員】14名

早川委員、小泉委員、小林委員、天野委員、内藤委員、小俣昭男委員、田辺委員、小俣二也委員、仁科委員、井上委員、武川委員、太子委員、河西委員、久根口委員(田口委員は欠席)

【大月市】

西室市長、小笠原総務部長、(以下企画財政課)小泉課長、小林課長補佐、星野副主幹、佐々木、(以下短期大学事務局)古屋副主幹、藤本副主幹

次 第

第1回審議会の開会に先立ち、西室市長が各委員に委嘱状の交付を行った。

1 開 会

2 市長あいさつ

3 委員紹介

4 会長選任

5 諮 問

6 議 事

(1) 審議会の運営について

(2) その他

7 閉 会

議事内容(発言の要旨)

(1) 審議会の運営について

事務局が、審議会設置の趣旨、大学・短期大学が置かれている社会環境、大月短期大学の設置からの経緯、現状、これまでの調査・検討の経過、将来構想のための基礎調査報告書等について説明を行った。

会 長 　ただ今事務局から説明があったわけですが、本学は開学から50年が経過している。建学当初は織物産業が盛んで、経済の単科の短期大学を創設したのだらうと思われる。社会が変化する中であって、短大の努力により定員割れを起こさずに運営してきたことは評価できるが、世の中の変化が著しいということもあ

り審議会が設置されたということであろう。事務局からの説明を受けて、委員から質問等あれば伺いたい。

委員 10数年前から短大の存在が変化している。4年制大学化やその失敗という例もあるようである。学部増設と言っても文部科学省においては、理工系、福祉系学部の新設は認め、文科系学部の新設は認めないという傾向にある。大月短期大学が経済という文科系の短期大学として継続していくのか、他の学部へに転換等を行っていくのか、大きな分かれ道となるであろうと思われる。4年制大学、また大学院への志向が高まり、短期大学というものが時代遅れということは間違いはないであろう。その中で、いかに発展するのかという議論が必要ではないか。大学としての考え方や財政状況もあるだろう。また、資格志向の時代でもある。今後の方向性について、考えがあるのであれば確認しておきたい。

委員 大月短期大学について、昭和60年と平成5年の2回、将来構想や活性化策について諮問がされ、その都度答申があったという説明があった。今回は3回目となるわけだが、過去2回の答申について短大の運営にどのように反映されているのか。

事務局 過去2回の答申を受けて、財政との関係もあったわけですが、設置者としては教育環境の充実（平成2～3年のC号棟の建設）、高校との分離移転等の答申に基づく基金の積み立て（現在10億円）を行ってきている。また、学校側は、学生へのサービスとして、教育カリキュラム等の見直しを常に行うなどの対応を行ってきた。

委員 大月短期大学の中で、学科の増設や4年制への方向転換について検討されたことはあるのか。

事務局 平成7年に、短期大学発展構想推進委員会からの学科の増設や4年制大学へ検討するようにとの報告を受けましたが、財政事情もあり、設置者としてまたは大学としてはそのような検討には入っていない。

委員 答申を行っても結局は財政問題に行き着く。市の財政状況を把握する必要があると思われる。また、県内や長野県における大学・短期大学の経営状況を把握し、大月短期大学にはどのような学生が集まっているのかを認識した上で議論を進めてもよいのではないか。

委員 次回のテーマを決定していただき、資料を予め読んでから出席するのでないと、この場で資料を渡されてそれについて議論するのは無理でないか。

会長 今後議論していく具体的な検討項目として、財政の問題が上がっているが他にはどのようなテーマが考えられるか。

委員 地域の高校生ニーズを知ること、必要な方向性が検討できるのではな

いか。福祉や情報の資格志向が進んでいるが、福祉・情報分野では専門学校も多く設立されている。専門学校ではなく短期大学として発展するということはどういうことか。専門教育のみではなく一般的な教養教育を行うという観点に立ち、これらの（高校生のニーズを満たす）方向性についてもテーマの一つとして議論をしてはいかがか。

委員 実際教育を行っている大学側から、このような学校にしたいとの考えが提案され、なお学外者から生き残りについて他の考え方が必要であるということではなければ、学外の第三者が議論できるのか。現在は経営が逼迫しているのではないが、将来的には問題になる可能性は非常に高い。問題になる前に最善策を議論していこうということなのではないか。

委員 学内での検討の経過はなされているのか、検討されたのであれば、その経過が知りたい。

会長 事務局に、次回までに資料の用意を願いたい。他に必要だと思われる資料があれば挙げていただきたい。

委員 大月市の財政状況、県内の大学・短期大学の改革・改組の状況について資料を用意願いたい。短期大学の特徴は、短期間であること、規模が比較的小さいこと、そして（自宅から）近くにある（ため、近くの学校に進学する）ということが挙げられる。大月短期大学については、県内からの入学者が少ないことが特徴の一つである。公立のメリットとしては、学費が安いということがある。全国の公立短期大学の改革状況についても資料を用意いただきたい。

会長 事務局には、市の財政状況、県内の大学・短期大学の改革・改組の状況、全国の公立短期大学の改革状況、以上の3点の資料を用意されたい。大月短大の設立時の建学の精神は理解できるが、社会が変化している。社会のニーズの変化にどのように対応するか。これまでの大学の経営は評価でき、特に大月短大には4年制大学への編入という大きな特長もある。

委員 県外から来ている学生に、なぜ大月短大を選んだのかを聞いてみると、4年制大学への編入のために入学したという答えを聞くことがよくある。とすれば、この特長を強めることも考えられる。また現在は、有名大学においても、学生の確保が難しくなっており、附属学校からの進学を受け入れを進める方向に変わってきている。それらの強化についても検討できるのではないか。

会長 大月短期大学への入学者は、県内だけでなく長野県等からの入学者が多い。長野県でも、松本や諏訪などで学校が強化されている。このように環境が変化している中で、学生をいかに確保していくか、ということもある。今後検討する項目として、財政の問題、大学がどのように方向性を模索しているのかを聞きたい、

資料としては、県内の大学・短大の改革状況、国内の公立短大の改革状況、短大の存在意義について資料を求めたい。全体の学生数が減少する中で、いかに学生を確保するかについて議論を進めたい。

委員 他で行われている特区では多様な教育が行われている。特区でないにしても、大月市において、小学校から短期大学までを一貫教育化することについて検討してはいかがか。

委員 小中学校では教員を山梨県で採用し、大月短大・附属高校では市での採用となっているため、一貫教育についての議論は難しいのではないか。

委員 今どちらかという各論について問題になっている。やがてはこの会議でもそういう問題について考えていながら経営等について議論すると思われる。まず審議会としては、短期大学が向かっていく方向について意見を出し合い認識する必要があるのではないか。短期大学の位置づけについて再考の必要があるという意見もある。その問題を考えるときに、どのような方向性があるのかは先ほどから話されているとおりだが、専修学校等との関係を含めた短期大学を取り巻く問題については40年前から議論されている。専修学校との学校数の関係や、男子学生が多かったことなど、短期大学を取り巻く環境が変わってきている。大月短大ではどのような方向にしたいと考えているのか。教養教育に重点を置く方向へ向かうのか、職業教育に重点を置くのか、方向付けが異なると、結論も異なってくるため、各論に入る前に、まずその方向付けが必要ではないか。やがてその各論に入っていくことになるだろうが、会議の回数としてはどのくらいなのか。

委員 できるだけ早く、3月を目途に答申を出すということになると、月に1回開催され、1回に1時間の議論ができたとしても7時間しかない。やはり各回のテーマを決めて議論を進めないといけないのではないか。

委員 まず、今の大月市の財政状況や大月短期大学がどのような経営になっているのか現状を把握し、今の経営がうまくいっているのであれば、さらなる発展のためについての議論を進めればよいのではないか。

委員 大学の中で話し合われたことを知ることができなくては、議論できないのではないか。

委員 先ほどから話しに出ている大学評価という制度により、大学が経営について危機感を持ち、評価に基づいて大学が自ら変わることが期待できる。市の財政にも限りがあるので、市の施策のための方向性を考える必要があるかと考える。

会長 経済の単科短期大学として大月短期大学を創設した当時の状況については先ほどのとおりであるが、大学の教員は専門を変えることができないため、社会ニーズの変化に対応するという点においては、非常に苦しいところである。大

月短期大学が社会のニーズへ対応していくことができなければ、存在価値はなくなってくるだろう。このことについては十分議論をされている。大月短期大学は、4年制大学への編入に力をいれていることがわかるが、このままで生き残ることができるのか。短期間で議論をすすめていかななくてはならないので、委員の皆様には是非一度資料を読んでいただきたい。

委員 4年制化は厳しい時代である。職業教育や総合教育などの個性化という選択肢もあるし、特に短期大学としてどのように生き残るか。個性化を図っていく必要がある。編入学という特徴は、短期大学として生き残る術の一つであり、大月短期大学の編入学の実績はすばらしいものである。

会長 現在の経営状況が、順調に行われているとしても、これからの社会において学生の確保等、生き残れるかが問題になるのではないか。今回は、日程については、10月6日(木)の午後2時からということにしたい。また、内容については、田口委員からお話いただき、大学のおかれている社会環境について認識し、議論を進めることとしたい。

委員 事務局に対しては、資料をあらかじめ各委員に送付を願いたい。

委員 18歳人口が毎年どのくらい減っていくのか、大学の学部系統ごとや短期大学への進学希望者の数の推移を調べていただきたい。短期大学への志願者の数の推移も考えないと、良い大学を作っても大学の経営努力のみでは解決しない問題も出てくる。例えば定員を減らすなどという研究も必要である。社会の変化への対応を考えなくてはならない。

会長 併せて、生徒数の見通しや志望動態についての認識も必要である。大月短期大学を存続したい気持ちは、みんなが持っている。しかし、甘い答申を出すことが、果たして市にとって良いことかどうかということもある。他の大学においても個性化を図り、さまざまな努力が行われている。他の学部への改組については、専任職員の専門が変えることができないという問題がある。厳しい見方で、資料を是非一度読んでいただきたい。